

《論文》

非行・犯罪からの離脱における元非行少年の変容と
支援プロセスに関する質的研究

－支援者育成を取り入れた立ち直り支援実践に注目して－

佐 脇 幸 恵

更生保護学研究 第23号 2023.12

非行・犯罪からの離脱における元非行少年の変容と支援プロセスに関する質的研究

—支援者育成を取り入れた立ち直り支援実践に注目して—

鈴鹿医療科学大学保健衛生学部医療福祉学科 佐脇 幸恵

(要旨)

本研究の目的は、少年院を出院した元非行少年が、社会生活を送る中でどのような問題や困難を抱えながら、どのような支援や関わりによって、価値や行動の変容が起こり、犯罪・非行から離脱するに至ったのか、その変容プロセスを明らかにすることである。さらに、NPO法人Aが実施する支援者となるための育成を取り入れた立ち直り支援に関する知見を得ることを目的とする。元非行少年3名を対象とした個別インタビューによる半構造化面接を実施し、そのうちの1名の逐語データと支援記録を複線径路・等至性モデル(TEM)を用いて分析を行った。その結果、非行から離脱した生活を送るには、一時的な支援でなく、継続して支えていくことが必要であり、常に寄り添い、いつでも相談できる人がいる安心感を得ることが重要であることが示された。そして、支援者になるという目標には、犯罪・非行から離脱した生活の維持へとつながる可能性が示唆された。

キーワード：**非行少年**、**立ち直り支援**、**支援者育成**、**複線径路・等至性モデル**

I. はじめに

近年、日本における少年犯罪の件数は減少傾向にあり、令和3年の少年による刑法犯、危険運転致死傷及び過失運転致死傷等の検挙人員は29,802人と戦後最少を更新した。一方、再非行少年率は33.7%と平成29年以降低下傾向にあるものの、非行少年の約3人に1人は再非行をしている現状にある。また、少年院出院者の再入院、刑務所

入所率を見ると、2年以内では10.8%であるが、5年以内では21.7%として2割を超えており、この実態は非常に憂慮すべき状況にある(法務省 2022)。ほとんどの少年は、再び犯罪や非行はしないと決意して少年院を出院するが、この数字からは、社会の中で犯罪・非行から離脱して生活することが容易ではないことが窺える。立ち直りを決意した少年たちが、再び犯罪・非行に

及ぶことなく、社会の中で安心して生活するためには、彼らが日々の生活でどのような問題に直面し、どのような支援や環境づくりを行うことで犯罪・非行から離脱することができるのかについて、明らかにする必要がある。

日本における社会の中での非行少年の立ち直りプロセスに関する研究は、坂野(2015)や千賀(2019)らによって行われているが、支援を受ける少年および青年に直接アプローチして、その変容プロセスを明らかにしたものは少ない。また、立ち直り支援の中で、元非行少年を支援者として育成していく実践を明らかにしたものは見られない。

そこで、本研究では、実際に社会の中で立ち直り支援を受けながら生活する元非行少年の語りと支援記録から、元非行少年がどのような生活上の問題や困難を抱え、支援者のどのような支援や関わりによって価値や行動の変容が起こり、犯罪・非行から離脱することができたのかを明らかにする。それと共に、支援されるだけでなく、支援する側へと成り行く元非行少年への支

援者育成を取り入れた立ち直り支援に関しても知見を得ることを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 研究協力者

本研究は、非行少年の立ち直り支援を行うNPO法人Aによる協力のもと行った。NPO法人Aは、どんな子でも絶対にできると信じながら寄り添い、将来に不安を抱くのではなく、わくわくした幸せな人生になるよう「過去を価値に」変えて、子どもたちを導いていくことを掲げ、支援を行っている法人である。非行少年の支援においては、彼らが抱える生きづらさや課題に寄り添いながら、共に生き、共に歩む支援を行い、一方的な支援をするだけでなく、元非行少年が支援者となるための支援も行っている法人である。このNPO法人Aに研究目的を伝えた上、法人が支援する元非行少年で、非行歴、支援内容、特性等から個人が特定されることがないと判断された者を紹介いただき、そこからインタビュー調査に同意が得られた3名を対象とした。研究協力者の概要を表1に示す。

表1 研究協力者の概要

研究協力者	年代	性別	障害の有無	罪名	少年院等への入院
B	20代前半	男	発達障害あり	強制わいせつ	少年鑑別所入所
C	20代前半	男	なし	共同危険行為 脅迫 窃盗	少年院入院
D	20代前半	男	なし	共同危険行為 傷害 大麻取締法違反	少年院入院

2. データ収集方法

データ収集方法は、NPO法人Aが蓄積している支援記録の提供を受けると共に、研究協力者3名を対象にインタビューガイドを用いて、概ね40分から60分の半構造化インタビューを行った。インタビューガイドは、事前にNPO法人Aのスタッフ(以下、「スタッフ」という。)と打ち合わせ、設問項目を精選して作成し、研究協力者にはインタビュー前に設問項目を伝えた。設問項目は、①犯罪歴、②犯罪に至った背景、③支援を受けることになった背景、④今までに誰からどのような支援を受けたのか、⑤NPO法人Aから受けた支援、⑥NPO法人Aによる支援が始まる前と現在の非行や犯罪に対する意識や考え、⑦NPO法人Aによる支援が始まる前と現在の社会生活や生活環境、⑧NPO法人Aによる支援が始まる前と現在の人間関係、⑨非行や犯罪から立ち直るために必要な支援や関わり、⑩これまでの経験や支援から、少年や若者が非行や犯罪から立ち直るために必要な対策の10項目について、質的データを収集した。

インタビューの実施期間は2022年12月～2023年1月である。インタビューは研究協力者のプライバシーを確保した上で実施した。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号22-036-02)。

4. 分析方法

研究協力者3名のうち、本研究の目的に合う対象者がC氏の一例のみであったた

め、C氏を分析対象とした。C氏のその時々的心情や感情を読み取りながら、支援者となる目標をもって、犯罪・非行から離脱するまでの変容プロセスとスタッフによる支援との因果関係を明らかにすることを考えた。それゆえ、時間を捨象せず個人の変容を社会との関係で捉え記述していく複線径路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model: 以下、「TEM」という。)(安田・サトウ2012)を用いて分析することとした。TEMは、人間を開放システムとして捉えるシステム論に依拠しており、個々人がそれぞれ多様な径路を辿っていたとしても、等しく到達するポイント(等至点)があるという考え方を基本とし(安田2005)、人間の発達や人生径路の多様性・複線性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みモデルである(荒川・安田・サトウ2012)。中坪・小川ら(2010)は、TEMを用いることで、人間の思考や行動、態度、感情の時間的な変化とその多様なプロセスを捉えるのに有効であるとしている。また、TEMは、1人のデータでも多人数のデータでも扱うことが可能である。1人のデータによるTEMは、多人数のTEMに比べて現象を詳しく記述することができ、個人の径路の深みを探ることができるという利点がある(荒川・安田・サトウ2012)。

分析データは、スタッフが作成した支援記録とC氏に行ったインタビュー内容の文字データを用いた。分析手順は、C氏の支援記録とインタビュー内容の文字データを熟読し、犯罪・非行に及ぶ前から犯罪・非行から離脱するまでのプロセスにおける思

考、心情、感情、行動に焦点をあてて抽出し、コード化した。そして、C氏が社会生活の中でどのような問題や課題に直面したのか、どのような支援や関わりによって、価値や行動が変容していったのか、変容のきっかけとなった心のありようや行動をとらえ、TEM図を作成した。

TEM図では、《EFP犯罪・非行からの離脱》をEFP(等至点)として定め、《OPP犯罪・非行行為に及ぶ》《OPP少年院に入院》《OPP少年院を出院》をOPP(必須通過点)、《BFP①相談できる人の存在》《BFP②親の関わり》《BFP③指導の受け入れ》《BFP④大人に対する見方の変化》《BFP⑤NPO法人Aによる支援を受けながらの生活》《BFP⑥スタッフに相談》《BFP⑦問題の解決》《BFP⑧

誰かに相談できる力の獲得》《BFP⑨目標の有無》をBFP(分岐点)とした。また、EFP(等至点)に近づいていくありようを阻害する力をSD(社会的方向づけ)、EFP(等至点)に近づくのを助ける力をSG(社会的助勢)によりとらえ、犯罪・非行の継続をP-EFP(両極化した等至点)とした。

Ⅲ. 結果

1. 犯罪・非行に及ぶ前から少年院を出院するまでの変容と支援

図1は、犯罪・非行に及ぶ前から少年院を出院するまでの変容と支援を記したTEM図である。

C氏は、学校で《SD①友達がおらず》、《学校に居場所がない》と感じていた。《SD①

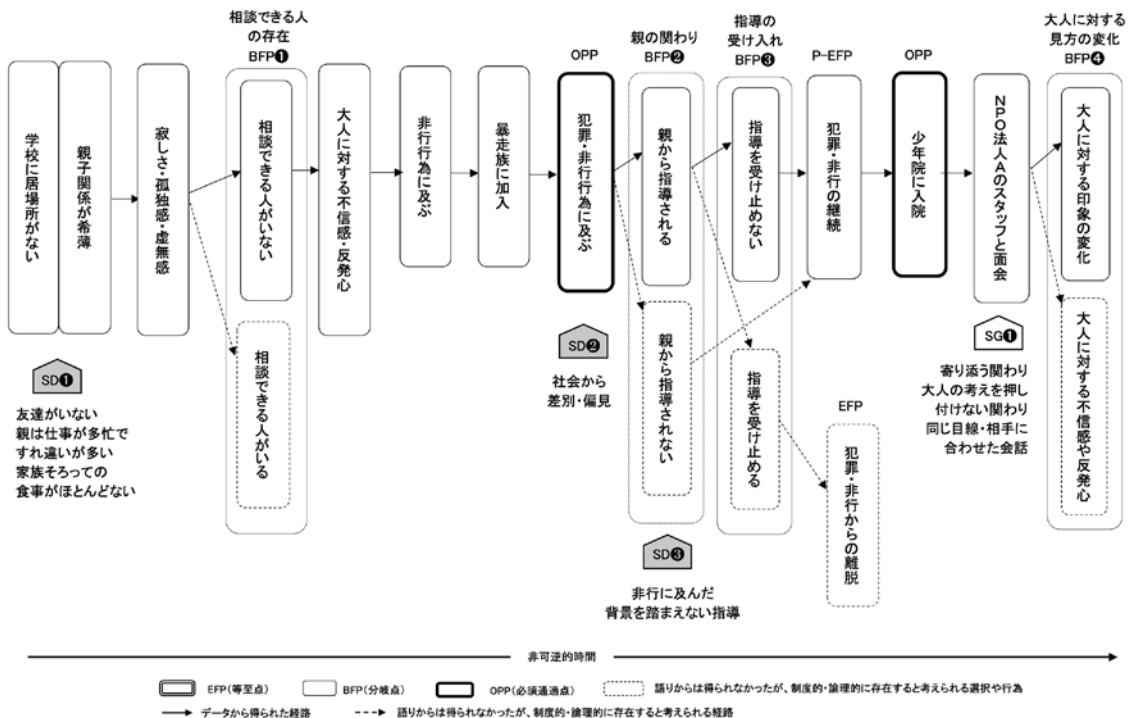


図1 犯罪・非行に及ぶ前から少年院を出院するまでの変容と支援

親は仕事が多忙ですれ違いが多い 家族そろっての食事もほとんどない」ほど「親子関係が希薄」な状態であった。やることもなく、「寂しさ・孤独感・虚無感」を感じながら日々を過ごしていたが、「BFP①相談できる人の存在」はなかった。そのうち、「大人に対する不信感・反発心」を抱くようになり、「非行行為に及ぶ」ようになって、ついには「暴走族に加入」することになる。C氏はこの時の自分について、「大人への反発とかでうまく言葉で表現できないから暴力など体で表現しちゃってるっていう部分があった。起こるべくして起きるような環境だった」と語っている。また、共に犯罪・非行に走る暴走族の仲間から「すごい」と言われることによって、「普通の人ならやらないことをやると自慢できる」「犯罪・非行はカッコいい」という考えになっていった。非行を続けることで「SD②社会から差別・偏見」を受けるようにもなり、「BFP②親の関わり」によって非行をやめるよう指導されるが、「BFP③指導の受け入れ」ができず、「P-EFP犯罪・非行の継続」によって逮捕され「OPP少年院に入院」することになる。

C氏は、少年院在院中に保護者からの依頼でNPO法人Aのスタッフと出会うことになる。面会時のスタッフによる「SG①寄り添う関わり」「SG①大人の考えを押し付けない関わり」「SG①同じ目線・相手に合わせた会話」によって、これまで不信感や反発心を抱いていた「BFP④大人に対する見方の変化」が現れた。C氏の語りには、「スタッフは、僕が思っていた大人とは違う

なっているふうに感じとりました。話しやすいし、自分の中でこういうふうになりたいなって具体的に思えた」とあり、大人に対する不信感を払拭して、目指すべく大人や将来像を前向きにイメージすることができていた。

2. 少年院を出院し社会生活を送る中での変容と支援

図2は、少年院を出院し、社会生活を送る中での変容と支援を示した図である。

再び犯罪・非行に及ばないように決意をもって、C氏は「OPP少年院を出院」し、社会の中で「BFP⑤NPO法人Aによる支援を受けながらの生活」がスタートする。スタッフによる「SG③住居支援」「SG④就労支援」によって、社会で生活していく環境を整えることができ、後に「会社経営を始める」ことになる。社長として、仕事と従業員の育成を行っていく中で、「仕事に対する責任感・従業員への思いやりを得る」ようになる一方、「SD④従業員・元従業員・元請けとのトラブル」が発生し、「仕事における悩み・問題を抱える」ようになる。

NPO法人Aでは、「SG②365日24時間寄り添う関わり」や「SG②定期的に日常生活を確認する支援」をしており、その中で、C氏は、仕事におけるトラブルや悩みなどを「BFP⑥スタッフに相談」するようになる。スタッフは「SG①仕事内容に関する支援」や「SG①お金の使い方についてのアドバイス」「SG④従業員等とのトラブルに対する支援」「SG④精神面での支え」などさまざまな支援を行い、C氏はスタッフによるアドバイスをもとにトラブルや問題に対処する

ことで、以前のように暴力をふるうことなく、＜対話による解決＞をすることができた。その具体的なエピソードとして、次のようなものもある。

C氏のもとに元従業員が無免許運転で会社の車をそのまま乗っているという情報が入り、C氏は元従業員と話し合うことにしたが、スタッフに「1人で行くと、我慢ができないかもしれないので、付いてきてもらっていいですか」と依頼した。現場に行くと、運転免許を持っていると言っていた元従業員が免許を持っていないことが分かり、C氏は今にも手を出してしまうぐらいの勢いになったが、ギリギリのラインで抑

えることができた。最後には元従業員と事故をした時のリスクなどを冷静に話すことができ、C氏なりに怒りを抑えて会話をすることができた。

この時、C氏は「(スタッフが)いなかったら、我慢できずに手を出していました」と語っている。また、従業員が退職したことでメンタルが荒れ、現場に出てもイライラし、従業員にあたってしまったことがあったが、スタッフによる「自分にとって必要な出来事だったし、辞める事にはなったけど、その子の生活を今まで養う事ができたという風に考えを変えていけば、良い風に送り出せると思うよ。これからはその

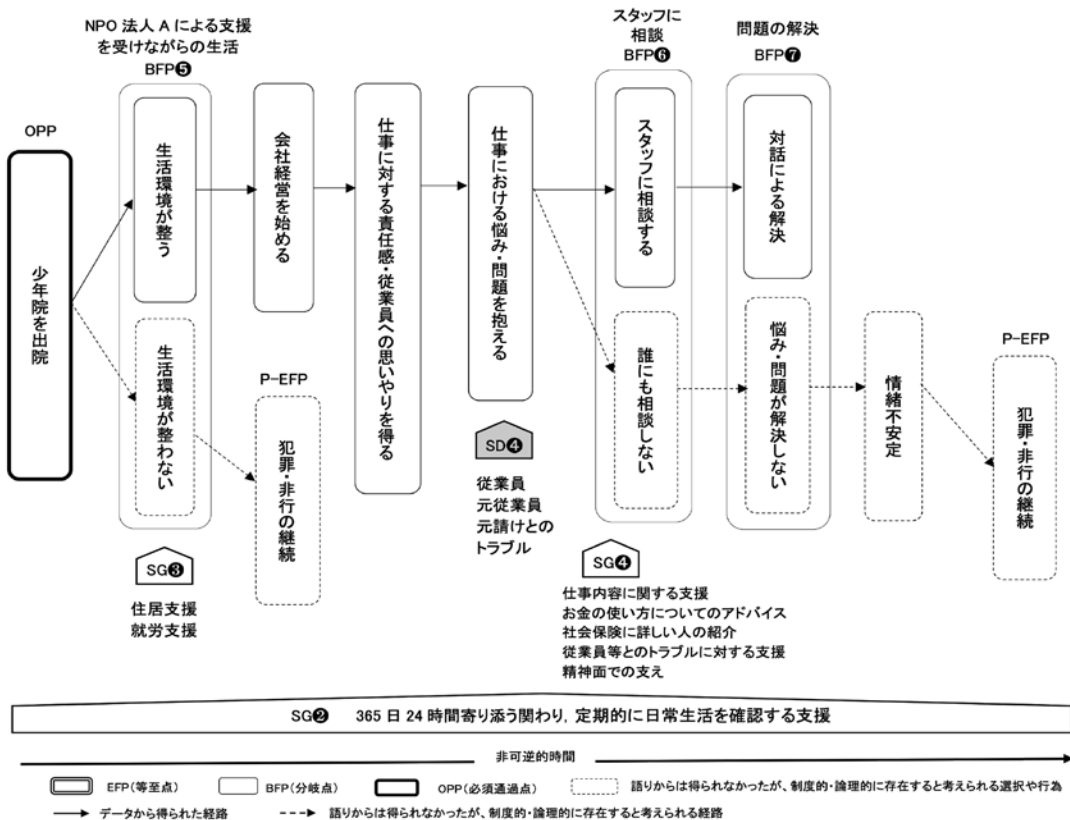


図2 少年院を出院し、社会生活を送る中での変容と支援

子の夢を応援してあげるのが役割だから、イライラするのではなく笑顔で送り出してあげよう」という言葉がけによって、「そうですね。切り替えていきます」と言って態度を改めることができた。このようなスタッフによるアドバイスに支えられながら、C氏は抱えている《BFP⑦問題の解決》ができ、安定した日常生活を送れるようになる。

3. 支援者になる目標をもって犯罪・非行から離脱するまでの変容と支援

図3では、伴走してくれる人がいる安心感を得て、犯罪・非行から離脱するまでの変容と支援を記している。

NPO法人Aでは、《SG⑥電話・LINEによるメッセージのやり取り》や《SG⑥月1～2回程程度の回数で本人に会う》などして定期的な関わりをもっている。C氏はスタッフによる継続的な関わりによって、<伴走してくれる人がいる安心感を得る>ことができ、社会生活を送る中での<人間関係におけるトラブルや悩み・情緒不安定>があっても、一人で抱え込まずに<自ら相談できる>ようになる。このスタッフの関わりについて、C氏は、「いろんな人は(スタッフが)特別なことをしてるとか、本当はすごい大切なことっていうか、会ってご飯食べるとか、こまめに連絡

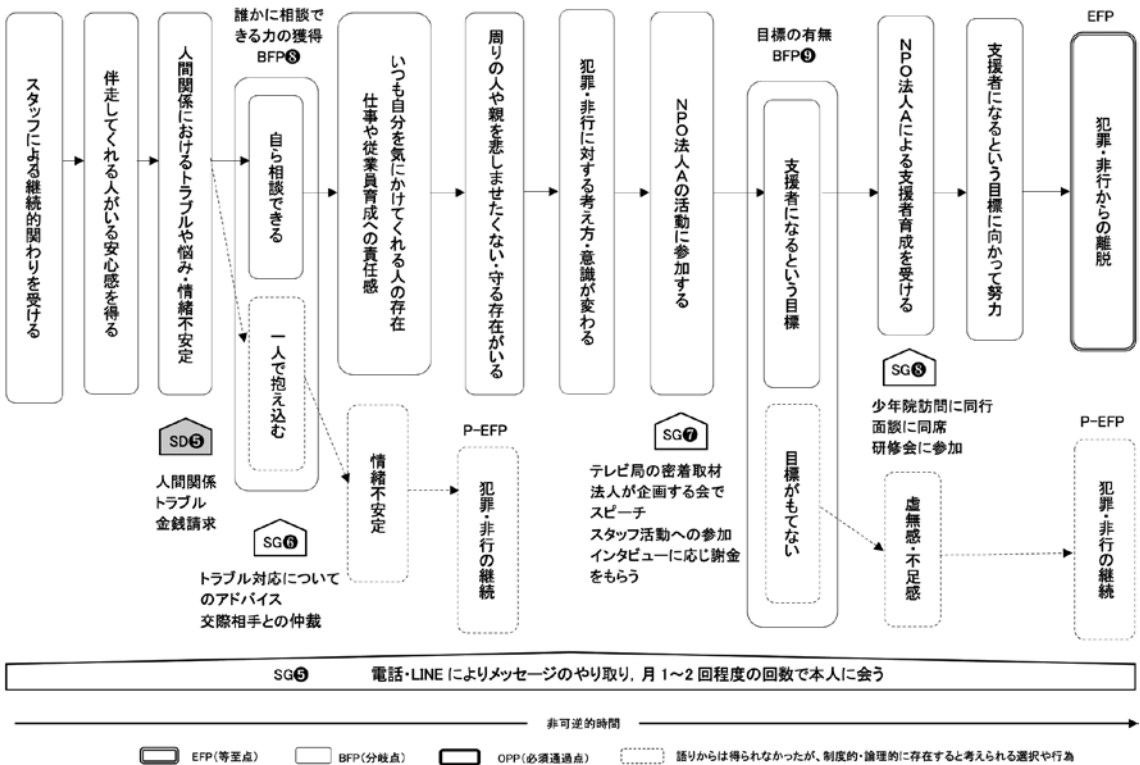


図3 伴走してくれる人がいる安心感を得て、犯罪・非行から離脱するまでの変容と支援

を取るとか、大切なことなんですけど、なかなかできない人が多いなかで、それをスタッフさんは当たり前やって接してくれているので、その積み重ねが僕の中では信頼になっています。一時的に気かけるとかは誰にでもできると思うんですけど、継続的にずっと、すぐに気にかけてくれる人とかってというのはなかなか自分の人生の中でいなかったの、そういう日々の積み重ねが今かなって思います」と語っている。スタッフの継続した寄り添う関わりによって、社会生活の中で人間関係におけるトラブルや悩み・情緒不安定>があっても、<自ら相談できる>ようになり、一人で抱え込まずに<BFP③誰かに相談できる力の獲得>や信頼につながっていた。C氏は交際相手と<SD⑤人間関係におけるトラブル>や<SD⑤金銭請求>などの問題を抱えたが、自らスタッフに相談し、相談を受けたスタッフは「(交際相手に対して)言葉を選んで会話をしていかなければいけないよ」「自分に落ち度があるならば、謝り続けて仲直りをする方向に進めていこう」「下手に刺激を与えてしまうと、また金銭を脅迫される可能性があるの、波風を立てないように気を付けていこう」といった言葉を伝えながら、<SG⑥トラブル対応についてのアドバイス>を行った。C氏がスタッフに「今度、彼女に話をしてほしい」と話した際には、C氏と一緒に交際相手のもとを訪問し、<SG⑥交際相手との仲裁>に入るなどの支援も行った。このような支援によって、C氏は<いつも自分を気にかけてくれる人の存在>を実感すると共に<仕事や従業員育成への責

任感>も相まって、<周りの人や親を悲しませたくない・守る存在がいる>という思いを強く抱くようになっていた。

このスタッフによる支援や関わりは、C氏の犯罪・非行に対する考え方や意識の変化にもつながっていく。C氏は「少年の時は犯罪をしているっていう感覚じゃなくて、悪いことをしてるっていう認識で、犯罪っていう意識があんまりなかった。でも、守らないといけない従業員だったりとか、僕だけの人生じゃなくなってきてる。仕事もそうですし、スタッフさんの接し方だったり、お母さんとの関係だったり。今までそういう深いところまで考えてなかったの、それがいろんな面で、立場だったり、スタッフさんに与えてもらった立場だったりっていうので責任が生じて、その責任に対して、自分の中の犯罪・非行に対する考え方っていうのも変わってきました」と述べていた。

NPO法人Aが行っている支援には、日々の生活への支援や環境の調整だけでなく、支援する元非行少年が支援者として育っていくというプロセスも重視し、元非行少年が支援者になれる場や支援者になるべく学びの場の機会を設けている。C氏もスタッフによる支援を受けながら、NPO法人A青年部のスタッフとして、<SG⑦テレビ局の密着取材>に協力したり、<SG⑦法人が企画する会でスピーチ><SG⑦(法人)スタッフ活動への参加><SG⑦インタビューに応じ謝金をもらう>などさまざまな活動を行っていた。<SG⑦テレビ局の密着取材>では、快く取材に応じ、「こんなに真剣に向き

合ってくれる人(=スタッフ)がいるんだなと感じました」と語り、その言葉を聞いたスタッフによる支援記録には、これまでC氏から支援を受けての感想を聞いたことがなく、Cの言葉を嬉しく受け止めたと記載されていた。《SG⑦法人が企画する会でスピーチ》では、「スタッフとして動いていることに喜びを感じている」と話し、《SG⑦(法人)スタッフ活動への参加》では、NPO法人Aが支援する他の少年との面談に同行し、C氏なりに励ましやアドバイスを少年に行った。支援対象者はメンタルが落ちている少年との面談であったが、その落ちてしまった原因をスタッフが探っていくプロセスを隣で聞いて、面談後に「そうやって話を持っていくんですね。めちゃくちゃ勉強になりました」という感想を述べている。《SG⑦インタビューに応じ謝金をもらう》経験では、アドボケイトのインタビューを受け、非行に走っている時に、信頼して相談ができる相手がいなかったことなどを語った。謝金の金額は大きくはないものの初めての謝金になると知ってとても喜び、自分の経験が誰かの役に立つことを体感することができた。このように、C氏は、〈NPO法人Aの活動に参加する〉中で、支援を受けるだけでなく、自分が〈支援者になるという目標〉ができ、スタッフと共に《SG⑧少年院訪問に同行》したり、少年との《SG⑧面談に同席》したり、《SG⑨研修会に参加》するなどの〈NPO法人Aによる支援者育成を受ける〉ようになっていく。これらのプロセスを辿ることで、社会の中で〈EFP犯罪・非行からの離脱〉に至っていた。

IV. 考察

1. 当事者に継続して寄り添う支援

本研究では、研究協力者C氏の質的データをTEMで分析し、TEM図とストーリーラインを作成することで、C氏が社会における生活の中で、どのような問題や困難を抱え、スタッフによるどのような支援や関わりによって、変容していったのかを明らかにした。

C氏の辿ったプロセスには、《大人に対する見方の変化》が分岐点の1つになっている。C氏は、小学生の頃から親とのすれ違いが多く、寂しいという感情を抱え、大人との関わりが希薄なまま成長し、成長するにつれて大人への不信感や反発心が形成されて犯罪・非行行為へと走らせていった。そんなC氏が、NPO法人Aの支援を受けると決めたことは、大人に対する見方が肯定的に変化したことを示しており、C氏の人生にとって大きな意味を持つと考えられる。少年が、自身の立ち直りに役立つ人的資源、例えば、親、補導委託受託者、先生、調査官などの支援を受け入れることができるかは、自身の立ち直りを大きく左右する(白倉2011)。この時、もし、C氏が大人に対する不信感や反発心が拭えず、スタッフによる支援を受けることを望まなかった場合、自助努力によって社会生活を送ることになるが、立ち直りへの意欲があっても、その意欲が維持できなかつたり、空回りしたりすることは十分に予想される。また、仕事や人間関係におけるトラブルが生じた際の分岐点に、《スタッフに相談する》《自ら相談できる》があるが、ここでスタッフ

に相談をすることができなかつた場合、適切な解決策を見つけて対処することができず、トラブルがさらに複雑化したり、精神的に追い込まれたりし、再び犯罪・非行に陥る可能性があると考えられる。日常生活におけるトラブルや問題は誰しものが抱える可能性があるが、その際に、常に寄り添ってどうしたらよいかを一緒に考え、支えてくれる人の存在は欠かせず、一時的でなく、継続した関わりの重要性が示唆された。

今回の分析結果において見られた支援は、かねてから言われてきたものと重なる部分が多いが、元非行少年の語りと支援記録に基づき実証されたことは、当事者視点での支援を考えていく上で重要であると言えよう。

2. 支援者として育成する支援を踏まえた立ち直り支援

今回の分析結果において見られた立ち直り支援は、白井ら(2005) 1)、坂野(2015) 2) 廣井(2015) 3) らによる先行研究において明らかにされてきた立ち直り支援および支援に必要な観点と概ね同様であったが、これまでの研究結果にない立ち直り支援の取り組みとして、元非行少年を支援者として育てていく立ち直り支援を行っていた点が注目される。

NPO法人Aは、青年部という将来子どもに関わる仕事を目指す学生や自分と同じように生きづらさを抱える子どもに寄り添い、支援したいという元非行少年などが所属する部がある。その部(青年部)では、困難を抱えた子どもたちに直接関わることで、その子どもの本音の部分を知ったり、

子どもたちと真剣に寄り添っている大人がどのような関わり方をしているのかを学べる機会を作っている。C氏もこの青年部に所属し、スタッフと共に少年院での講演に同行して、少年らの前で話をしたり、NPO法人Aが企画する会でスピーチをしたり、さらには、NPO法人Aが支援する他の少年との面談に同席して、スタッフによる関わり方を直接見て学び、時には自身も少年に励ましの声をかけたり、アドバイスをするなどして、支援者となるべく学びや活動をしていた。元非行少年が支援者となるケースは、これまでも多くあるが、彼らのほとんどは自助努力によって支援者となっているケースが多い。その中で、NPO法人Aでは、日常生活の支援をするだけでなく、彼らが将来、支援者となれる支援も同時に行っており、注目すべきであると考えられる。湯原(2020)は、元非行少年が自らの改善や更生への努力について市民の前で語る場を設けることは、少年の非行から立ち直りを促進するのみならず、市民による少年への理解を促し社会的包摂を促進する点からも効果が期待できると述べている。

C氏は、NPO法人Aの青年部のスタッフとして、さまざまな活動に参加できることに喜びを感じ、自らが生きづらさを抱える子どもたちの力になりたいと主体的に勉強し、努力をしていた。支援者になるための支援をも含めた立ち直り支援は、支援を受ける者が、徐々に支援する側として役割が変わっていき、これまでの自身の経験が誰かの役に立ち、同じような生きづらさを抱えている子どもの力になれることが体感で

できれば、自信につながり、支援者としてふさわしい自分でありたいという気持ちを維持し続けることができるだろう(湯原2023・佐脇2023)。そして、それが、犯罪・非行からの離脱にもつながり、犯罪・非行から離脱した生活の維持へとつながる可能性が示唆される。廣井(2015)は、非行からの立ち直りとは、犯罪行為を行わないように限定されるのではなく、主体的に自分の生き方を捉え、社会とのつながりの中で自己意義を感じ取ることであると述べているが、支援者育成をも取り入れた立ち直り支援は、主体的に自分の生き方を捉え、社会とのつながりの中で自己意義を感じ取ることにつながると考える。

V. おわりに

本研究の結果、少年院出院者が社会生活を送る中で抱える困難には、仕事における問題や人間関係におけるトラブルなどがあることがわかった。仕事や人間関係の悩みによる心理的ストレスは、じわじわとメンタル面や日々の生活に負の影響を与えることになる。うまくいかないことがあっても、心の支えとなるものがあり、さまざまな人との関係があることで心のブレーキになる。非行・犯罪から離脱した生活を送るには、継続して寄り添う支援が不可欠であることはもちろんであるが、支援を受けるだけでなく、支援する側として、自分以外の誰かの力になれることを体感していくことで、離脱への意識はさらに高まり、その生活は維持される可能性が示された。一方で、研究対象者が1名と限定的であったこ

とから、支援者になりゆく育成を取り入れた立ち直り支援の効果や支援プログラムについては、さらに検証を進めていく必要がある。また、本研究におけるインタビュー調査では、聞き手が回答を誘導することがないように留意し、元非行少年の思いや意見を率直な言葉で語ってもらうことを重視した。インタビューでは、社会生活を送る中でこれまでに受けた支援について、NPO法人スタッフによる支援や民間企業の社長によるサポートを口にしたが、保護観察官や保護司といった言葉は登場せず、保護司等によって行われた支援は語られなかった。口にしなかった理由として、さまざま考えられるが、それらへの言及がなかったことも含め、保護観察官や保護司による支援が少年にどのように受け止められていたのかを解明していくことが今後の課題である。

【謝辞】

本研究の調査にご協力いただいたNPO法人Aの関係者の皆様、快くインタビュー調査にご協力いただいた3名の研究協力者の皆様に感謝申し上げます。

注

1)白井ら(2005)は、立ち直りには親との出会い直しが必要であり、そのためには親以外の大人による「援助者との出会い」と援助が重要であると述べ、出会いのためには少年の心理的な特性として「ひたむきに物事に取り組む力」と「抑うつに耐える力」が重要であるとしている。ただし、常にそのような力が高い状態であるわけ

ではないことや、両方とも高くあるとはかぎらない。

2)坂野(2015)は、非行からの離脱を促進するための支援として、①少年が適応する社会的環境を整備する、②その環境との関わりを通じて、自己効力感、自尊心を回復できるようにする、③立ち直りの過程において少年たちが迫られるアイデンティティの変容に関して、そのつらさ、不安をサポートしながら、主体的、積極的に変容に向かえるよう心理面への支援を行う、④少年たちが、非行があった過去を踏まえてアイデンティティを再統合し、それが社会的にも承認されるよう、非行をやめた少年のアイデンティティが社会に根づくまで継続的に支援することが重要になるとしている。

3)廣井(2015)は、立ち直り支援とは、①自分の一部を否定したり、排除することから自由であること、すなわち自分を全体として捉えることができること、②社会とつながりがあると感じられること、③主体的に人生を営むことができることとし、立ち直りには、「個別性」「相互性」「継続性」の3概念が欠かせないと述べている。

引用・参考文献

- ・荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ「複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例」『立命館人間科学研究』25(2012年)95-107頁。
- ・岡邊健編『犯罪・非行からの離脱』ちとせプレス(2021年)。
- ・香曾我部琢「複線径路・等至性モデルを用いた保育カンファレンスの提案：保育者が感情共有プロセスとそのストラテジーに着目して」『宮城教育大学紀要』48(2014年)159-166頁。
- ・近藤茉莉依・宮戸美樹「挫折経験から立ち直りまでのプロセス—立ち直りを促進する要因の検討—」『横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集』18(2018年)55-74頁。
- ・坂野剛崇「少年の非行からの立ち直りのプロセスに関する一考察：元非行少年の手記への複線径路等至性モデルによるアプローチ」『関西国際大学研究紀要』13(2015年)47-60頁。
- ・佐脇幸恵「研究②インタビュー調査」『NPO法人Aによる非行少年の立ち直りのための支援の実態と特徴に関する研究』日本福祉大学ソーシャルインクルージョン研究センター(2023年)36-50頁。
- ・白井利明・岡本英生・栃尾順子・河野莊子・近藤淳哉・福田研次・柏尾眞津子・小玉彰二「非行からの少年の立ち直りに関する生涯発達の研究(V)：非行から立ち直った人への面接調査から」『大阪教育大学紀要』IV, 教育科学 54(1)(2005年)111-129頁。
- ・白井利明・岡本英生・小玉彰二・近藤淳哉・井上和則・堀尾良弘・福田研次・安部晴子「非行からの少年の立ち直りに関する生涯発達の研究(VI)―「出会いの構造」モデルの検証―」『大阪教育大学紀要』第IV部門 教育科学 60(1)(2011年)59-74頁。
- ・白倉憲二「非行少年の立ち直りを促進する要因についての探索的研究」『帝京大学心理学紀要』15(2011年)11-25頁。
- ・千賀則史「当事者中心モデルによる非行からの立ち直り支援の意義と可能性：少年非行の支援団体を設立した元非行少年の語りを通して」『コミュニティ心理学研究』22(2019年)98-112頁。
- ・特定非営利法人非行克服支援センター『何が非行に追いついて、何が立ち直る力になるか』新科学出版社(2014年)。
- ・長瀬裕子「非行、不良行為経験からの立ち直りにおける当事者と支援者の心理的変容プロセス」『人間科学研究』24(2011年)71頁。

- ・中坪史典・小川晶・諏訪きぬ「高学歴・高齢出産の母親支援における保育士の感情労働のプロセス」『乳幼児教育学研究』19(2010年)155-166頁。
- ・廣井いずみ『非行少年の立ち直り支援—「自己疎外・家庭内疎外」と「社会的排除」からの回復』金剛出版(2015年)。
- ・平井秀幸「犯罪・非行からの『立ち直り』?—社会構想への接続」岡邊健編『犯罪・非行の社会学—常識をとらえなおす視座』有斐閣(2014年)249-271頁。
- ・Veysey,B.M.Rethinking reentry.The Criminologist,33(3)(2008年)1-5頁。
- ・法務省「令和4年版犯罪白書」(2022年)。(https://www.moj.go.jp/content/001387336.pdf, 2023年6月1日アクセス)
- ・間野百子「課題を抱える少年への援助の継続によるボランティアの意識の変容と学び—BBS(Big Brothers and Sisters)会「ともだち活動」援助者の当事者性の深まりに着目して—」博士論文, 白梅学園大学大学院(2019年)。
- ・Maruna,S.Making good:How ex-convictsreform and rebuild their lives.Washington,DC:American Psychological Association(2001年)。津富宏・河野壮子(訳)『犯罪からの離脱と「人生のやりなおし」—元犯罪者のナラティブから学ぶ』明石書店(2013年)。
- ・Maruna,S.&LeBel,T.Strengths-Based Approaches to Reentry:Extra Mileage toward Reintegration and Destigmatization『犯罪社会学研究』34(2009年)59-81頁。
- ・森丈弓・花田百造林「少年鑑別所に入所した非行少年の再犯リスクに関する研究—split population modelによる分析—」『犯罪心理学研究』44(2007年)1-14頁。
- ・安田裕子・サトウタツヤ『TEMでわかる人生の径路 質的研究の新展開』誠信書房(2012年)。
- ・安田裕子「不妊という経験を通じた自己の問い直し過程—治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から—」『質的心理学研究』4(2005年)201-226頁。
- ・湯原悦子「元非行少年が自らの回復のストーリーを語る意義と効果」『更生保護学研究』17(2020年)41-52頁。
- ・湯原悦子「研究①支援記録の分析」『NPO法人Aによる非行少年の立ち直りのための支援の実態と特徴に関する研究』日本福祉大学ソーシャルインクルージョン研究センター(2023年)3-35頁。

英文タイトル

Changes in Former Juvenile Delinquents and Processes that Support Them in Moving Away from Delinquency and Crime: A Qualitative Study Focusing on Rehabilitation Support Practices that Incorporate Supporter Training

Yukie Sawaki

This study aimed to identify the types of support and interactions that effected changes in values and behavior leading to a move away from delinquency among former juvenile delinquents released from a juvenile training school. The study explored the processes that effected such changes to understand the difficulties that former juvenile delinquents experience during their rehabilitation into society. The study also sought to gain insight into a rehabilitation support program that incorporates supporter training offered by a nonprofit organization. Semistructured interviews were conducted on an individual basis with three former juvenile delinquents, and the verbatim transcripts and support records of one of the interviewees were analyzed using the trajectory equifinality model. The findings demonstrated the need to provide former juvenile delinquents with ongoing support for moving toward a life away from delinquency rather than offering them only one-time support; further, it is important for them to feel safe and secure by having someone with whom they can talk and who is always present for them. The analysis results also suggested that for these individuals, setting the goal of becoming supporters themselves may be associated with staying away from crime and delinquency on a long-term basis.

Keywords : **juvenile delinquents, rehabilitation support, supporter training, trajectory equifinality model (TEM)**